

主体性等評価が求められる背景

2026・2・4 重枝 一郎

数年前、大学入試の様々なルールが変わる予定だった。しかしながらご存知の通り大幅な入試改革は持ち越しとなった。ちょうどこの高大接続改革まったなしの状況のとき私は福翔高校にいた。その大きな波にのまれ、溺れそうになりながら、その対応に悪戦苦闘していた。

このとき一番溺れそうになっていた案件は、大学入試における選抜方法のことである。つまり、生徒の総合的評価の中で、「主体性等」の評価の方向性や、それに伴う私たち教師の業務についてである。

思い起こせば13年前に福翔高校に赴任し、最初に「福翔改革サードステージ」として、学校の経営的課題と教育的課題の目標づくりをした。本校で、毎年年度初めにお示しているリーフレットのようなものである。その最上位の目標は「主体性の育成」として書いた。これは、この入試改革に対応する方向性としてはよかったのだが、評価等の仕方については具体的に示せていなかった。時は流れ、7年前には、全国的にこの話題一色となり、「主体性等評価」や「ポートフォリオの活用」に関する様々な取組が見られようになった。この頃から生徒本人が学校のPCを使って、探究活動、生徒会・委員会、学校行事、部活動、学校以外の活動、留学・海外体験、表彰・資格・検定などの項目についての取組や実績、学んだことの振り返りを入力する「eポートフォリオ」作成の時間を設定していた。この「eポートフォリオ」と「入試の出願」を連動させるシステムが大学入試の流れになった。

なぜこのような方向になったのか？それは、社会の変化と、明確化された“学力の3要素”が背景にある。社会が大きく変化し、これまでの日本のキャッチアップ型の教育・社会・経済の在り方では、日本の社会が現在抱えている様々な課題や、世界で直面しているような地球規模の課題に対応できなくなっていることがあげられる。

そのため「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」とともに「主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度」の3つが“学力の3要素”として明確化され、その評価が求められるようになった。これまでの入試でも、学力試験を通じてかなりの部分は測定・評価できており、また、「主体性等」については、AO入試、推薦入試、面接、プレゼン、志願理由書、推薦書などで評価できていたと言われていた。

そもそも主体性とは何か？その評価は難しく感じる。主体性を漠然と捉えたとき、客観的に評価が可能な“能力”と、態度・意欲・人間性といった評価が難しい“資質”が混在しているからである。

今回の話は、この主体性の多元性（能力と資質の混在）についての客観的評価は難しいということまでになるが、一般的な学校ではこの難しい評価についてどうしてきたか？それは、教育活動全般において、学んだことの振り返りなどをワークシートに書かせて、積み上げ的にファイリングしていた。このポートフォリオといえる取組の本来の目的は生徒の成長であり、その延長線に入試がある。また、「主体性」「協働性」という今日的な課題は、自ら人に関わる「主体性」、人と協力する「協働性」はどちらも必要になることから、人が集まる学校という場には、成長条件が整っていると言われる。だから、学校という場所で、周りの人と適度に依存させ合いながら少しずつ成長させていけばいいと私は考えている。

つまり、この適度に依存し合うことを生徒に教えることが、「自立」につながっていく。3学期始業日での校長講話で、「自立って何？」について話した。何かに依存しないことが「自立」になるのではなく、**依存先をたくさん持つことが「自立」**という話である。

【1/29】はないちの最終発表会で「チャーミングなファーストペンギン賞（校長賞）」を受賞した、S2の久保田さんが校長室に来て、幼稚園で実践した紙芝居を披露してくれました。とってもあたたかい空気に包まれました。和田、高木、森永、堀之内、岩本、奥園、木下、越智先生たちも観客で来てくれました。幼稚園の先生になれるといいな。